

第三章 調査結果の分析

～クロス集計結果を中心に～

第三章 調査結果の分析～クロス集計結果を中心に～

前章で、市民全体及び性別・年代別に人権・同和問題に対する学習経験や、人権意識の状況などについて概要を記しました。この章では、記した概要をさらにクロス集計をとおして掘り下げていきます。例えば、人権・同和問題を学習した人とあまり学習しなかった人との間に、何か人権意識について有為な差異があるでしょうか。前回調査とも比較しながら分析しましょう。

第1節 人権・同和問題に関する学習経験と問題の受け止め方

学習結果は、一般に、①知識を習得した状態、②自分の人生や生き方と関わる（実存的）状態、さらに、③それを、周囲の状況をも勘案して実行（実施・実践）する状態など、いくつかの段階に分けて観察することができます。①は主として学齢期を中心にした学習が展開します。②や③は、主として家庭・地域・職場などにおける社会生活一般を経験する過程で実行・実践を伴う生涯学習として展開する学習です。では、こうした学習経験は、人権・同和問題の受け止め方にどう影響しているのでしょうか。

1 世界人権宣言の学習成果と人権意識

調査票の問5で、「水平社宣言」から「差別をなくす運動月間」まで、人権・同和問題に関わる9つの項目を上げ、知っているか否かを尋ねました。知っていると答えた方が比較的学習効果が高かった人たちであると仮定して、それが人権・同和問題にどう影響しているかをまとめてみましょう。

「世界人権宣言」についてのクロス集計結果は、表3-1のとおりです。

問5-3（世界人権宣言）×問17-3（同和地区は所得の低い人が多く住んでいる）表3-1（1）

問5-3 \ 問17-3	回答者数	そう思う	どちらか といえば そう思う	どちらと もいえな い	どちらか といえば そう思わ ない	そう思わ ない	無回答・ 不明
知 っ て い る	472 100.0%	13 2.8%	45 9.5%	228 48.3%	52 11.0%	109 23.1%	25 5.3%
内容は知らないが 名称は聞いたことがある	717 100.0%	17 2.4%	67 9.3%	362 50.5%	76 10.6%	145 20.2%	50 7.0%
知 ら な い	173 100.0%	5 2.9%	15 8.7%	90 52.0%	16 9.2%	38 22.0%	9 5.2%

カイ2乗値 2.170

p値 0.975

問5-3（世界人権宣言）×問7-3（障がい者と同じ職場で働くとしたら不安になるか）

表3-1（2）

問5-3 \ 問7-3	回答者数	な る	少しなる	どちらと もいえな い	あまりな らない	ならない	無回答・ 不明
知 っ て い る	472 100.0%	24 5.1%	80 16.9%	83 17.6%	136 28.8%	137 29.0%	12 2.5%
内容は知らないが 名称は聞いたことがある	717 100.0%	30 4.2%	140 19.5%	157 21.9%	184 25.7%	184 25.7%	22 3.1%
知 ら な い	173 100.0%	12 6.9%	29 16.8%	34 19.7%	43 24.9%	54 31.2%	1 0.6%

カイ2乗値 9.517

p値 0.301

問5-3 \ 問23	回 答 者 数	し 指 差 別 的 な 発 言 で あ る こ と を 指 摘 し て 、 差 別 に つ い て 話 し 合 う	い ど う に か し て 差 別 は い け な い こ と を 伝 え る	表 向 き は 話 を 合 わ せ る が 、 ど う に か し て 差 別 は い け な い こ と を 伝 え る	し 表 向 き は 話 を 合 わ せ 、 何 も し な い	し も 表 向 き は 話 を 合 わ せ 、 自 分 も 差 別 的 な 言 葉 を 口 に し て し ま う	他 の 話 題 に か え よ う と す る	何 も せ ず 、 そ の 場 は 黙 っ て い る	そ の 他	無 回 答 ・ 不 明
知 っ て い る	472 100.0% (100.0)	105 22.2% (24.1)	144 30.5% (26.0)	37 7.8% (8.7)	1 0.2% (0.6)	61 12.9% (13.2)	93 19.7% (21.1)	18 3.8% (6.4)	13 2.8%	
内 容 は 知 ら な い が 名 称 は 聞 いた こ と が あ る	717 100.0% (100.0)	100 13.9% (17.3)	155 21.6% (24.3)	69 9.6% (9.3)	6 0.8% (0.4)	112 15.6% (14.4)	210 29.3% (28.9)	36 5.0% (5.3)	29 4.0%	
知 ら な い	173 100.0% (100.0)	19 11.0% (9.0)	28 16.2% (17.5)	12 6.9% (12.0)	1 0.6% (0.0)	22 12.7% (17.0)	78 45.1% (34.5)	9 5.2% (10.0)	4 2.3%	

カイ2乗値 65.978 (前回 45.330)

p値 0.000 *** (前回 0.000 ***)

表からわかるのは、同和地区に対して持つイメージについては、「世界人権宣言」を知っているかどうかとの相関はあまり強くありません。また、職場に障がい者がいることについても、「世界人権宣言」を知っているかどうかの影響はあまりありません。

しかし、同和地区の出身者に対する差別的発言があった場合に、自分がとる態度という実践課題になると、「世界人権宣言」を知っている人と知らない人との間には、態度に相関のあることがわかります。「世界人権宣言」を知っている人たちの52.7%が「差別的な発言であることを指摘して、差別について話し合う」「表向きは話を合わせるが、どうにかして差別はいけないことを伝える」と答えたのに対して、知らない人たちの場合の同じ回答は、27.2%に留まります。逆に「何もせず、その場は黙っている」と答えた人の比率を見ると、知っている人の場合19.7%なのに対して、知らない人の場合45.1%になります。

この結果を前回調査と比べてみましょう。知っていると答えた人の場合、前向きな態度は52.7% (前回50.1%) に微増しています。後向きの態度は19.7% (前回21.1%) に微減しています。逆に知らないと答えた人の場合、前向きな態度に変化はありませんが、後ろ向きの態度は45.1% (前回34.5%) へと大きく跳ね上がっています。

2 日本国憲法の学習成果と人権意識

同様に日本国憲法の認知状況と人権意識との相関を表3-2から見てみましょう。

問5-2（日本国憲法）×問17-3（同和地区は所得の低い人が多く住んでいる） 表3-2（1）

問5-2 \ 問17-3	回答者数	そう思う	どちらか といえば そう思う	どちらと もいえな い	どちらか といえば そう思わ ない	そう思わ ない	無回答・ 不明
知 っ て い る	970 100.0%	22 2.3%	99 10.2%	482 49.7%	100 10.3%	216 22.3%	51 5.3%
内容は知らないが 名称は聞いたことがある	345 100.0%	10 2.9%	27 7.8%	176 51.0%	38 11.0%	64 18.6%	30 8.7%
知 ら な い	56 100.0%	3 5.4%	2 3.6%	29 51.8%	7 12.5%	11 19.6%	4 7.1%

カイ2乗値 7.743

p値 0.459

問5-2（日本国憲法）×問23（同和地区出身者への差別発言に対する態度） 表3-2（2）

問5-2 \ 問23	回 答 者 数	し 合 う	差 別 的 な 発 言 で あ る こ と を 指 摘 し て 、 差 別 に つ い て 話 を し 合 う	い か ん が け な い こ と を 伝 え る	表 向 き は 話 を 合 わ せ る が 、 ど う に か し て 差 別 は い け な い	表 向 き は 話 を 合 わ せ 、 何 も し な い	表 向 き は 話 を 合 わ せ 、 自 分 も 差 別 的 な 言 葉 を 口 に し て し ま う	他 の 話 題 に か え よ う と す る	い る も せ ず 、 そ の 場 は 黙 っ て	そ の 他	無 回 答 ・ 不 明
知 っ て い る	970 100.0%	177 18.2%	260 26.8%	81 8.4%	3 0.3%	130 13.4%	246 25.4%	43 4.4%	30 3.1%		
内容は知らないが 名称は聞いたことがある	345 100.0%	40 11.6%	61 17.7%	35 10.1%	5 1.4%	60 17.4%	114 33.0%	16 4.6%	14 4.1%		
知 ら な い	56 100.0%	10 17.9%	7 12.5%	2 3.6%	0 0.0%	5 8.9%	25 44.6%	4 7.1%	3 5.4%		

カイ2乗値 43.795

p値 0.000 ***

同和地区に対するイメージについては、日本国憲法を知っているかどうかとの相関は強くありません。しかし、同和地区出身者に対する差別的発言があった場合に自分がとる態度については、知っている人の方が知らない人よりも明らかに前向きであることがわかります。ただ、その相関は、世界人権宣言を知っている人よりは若干弱くなります。

これらのことから、人権に関する認識が深いほど態度によい影響が出ることは明らかです。世界人権宣言や日本国憲法などについて、それらが作られた歴史的背景や意義を、深く理解できるよう教育や啓発を進めていく必要があります。

第2節 学習の評価（受け止め方）と人権意識

人権・同和教育の効果が一定程度あることがわかりましたが、すべての市民に同じように現われるわけではありません。それは、受けた教育の受け止め方（行った学習）と関わるのではないかと推測されます。この点から人権意識の実態について探ってみましょう。

1 同和問題の学習に対する評価と人権意識

問22（同和問題を学習した感想）×問13-5（差別問題は差別されている人の問題）

表3-3

問22 \ 問13-5	回答者数	そう思う	どちらか といえば そう思う	どちらと もいえな い	どちらか といえば そう思わ ない	そう思わ ない	無回答・ 不明
学習を受けて よかったと思っている	458 100.0%	2 0.4%	13 2.8%	59 12.9%	122 26.6%	256 55.9%	6 1.3%
学習を受けたことはよいが、 内容は改善した方がよい	142 100.0%	2 1.4%	5 3.5%	38 26.8%	40 28.2%	52 36.6%	5 3.5%
受けない方が よかったと思っている	43 100.0%	1 2.3%	9 20.9%	5 11.6%	5 11.6%	23 53.5%	0 0.0%
よくわからない	165 100.0%	3 1.8%	6 3.6%	46 27.9%	49 29.7%	53 32.1%	8 4.8%

カイ2乗値 80.153

p値 0.000 ***

問22（同和問題を学習した感想）×問32-7（そっとしておけば自然と差別はなくなる）

表3-4

問22 \ 問32-7	回答者数	そう思う	どちらか といえば そう思う	どちらか といえば そう思わ ない	そう思わ ない	わからない	無回答・ 不明
学習を受けて よかったと思っている	458 100.0%	26 5.7%	56 12.2%	79 17.2%	242 52.8%	36 7.9%	19 4.1%
学習を受けたことはよいが、 内容は改善した方がよい	142 100.0%	20 14.1%	28 19.7%	21 14.8%	57 40.1%	11 7.7%	5 3.5%
受けない方が よかったと思っている	43 100.0%	20 46.5%	10 23.3%	3 7.0%	2 4.7%	6 14.0%	2 4.7%
よくわからない	165 100.0%	27 16.4%	31 18.8%	20 12.1%	43 26.1%	32 19.4%	12 7.3%

カイ2乗値 129.295

p値 0.000 ***

表3-3は、同和問題に関する学習に対してどう感じているかを尋ねた結果と「差別は差別されている人の問題であって自分には関係ない」という意見に対する考え方をクロス集計したものです。同

様に、表3-4は、同和問題の解決のために「そっとしておけば、自然と差別はなくなっていく」という意見に対する受け止め方をクロス集計した結果を示したものです。

どちらのクロス集計からも、「同和問題の学習をしてよかったと思っている」人の方が「同和問題の教育を受けない方がよかった」と思っている人よりも、前向きな意識であることがわかります。特に、「そっとしておけば、自然と差別はなくなっていく」という意見については、教育・学習の受け止め方との相関が強いことがわかります。

この点から検討しなければならないのは、単に教育・啓発を行うというだけでなく、学習者が、「受けてよかった」と受け止めるような内容や方法を開発することです。もちろん、学習者側にも課題はあります。「また人権学習か」「もう聞き飽きた」というような受け止め方をすると、いつの間にか人権を侵害してしまったり、重大な人権問題を見過ごしてしまったりすることがあるからです。人権・同和問題を自分自身の問題として問う姿勢が求められます。

2 学習評価と人権意識に関する近時の動向

ところで、この点について、前回調査と比べた場合、市民にどんな変化が起きているでしょう。表3-5に、前回調査との比較を示します。

問22（同和問題を学習した感想）×問13-5（差別問題は差別されている人の問題）表3-5（1）

問22 \ 問13-5	回答者数	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答・不明
学習を受けてよかったと思っている	458 100.0% (100.0)	2 0.4% (0.9)	13 2.8% (3.4)	59 12.9% (13.4)	122 26.6% (19.2)	256 55.9% (63.1)	6 1.3%
学習を受けたことはよいが、内容は改善した方がよい	142 100.0% (100.0)	2 1.4% (1.5)	5 3.5% (3.7)	38 26.8% (22.8)	40 28.2% (20.6)	52 36.6% (51.5)	5 3.5%
受けない方がよかったと思っている	43 100.0% (100.0)	1 2.3% (0.0)	9 20.9% (10.2)	5 11.6% (30.6)	5 11.6% (16.3)	23 53.5% (42.9)	0 0.0%
よくわからない	165 100.0% (100.0)	3 1.8% (4.5)	6 3.6% (5.7)	46 27.9% (28.0)	49 29.7% (23.6)	53 32.1% (38.2)	8 4.8%

カイ2乗値 80.153 (前回 50.675)
p値 0.000 *** (前回 0.000 ***)

問22（同和問題を学習した感想）×問32-7（そっとしておけば、自然と差別はなくなっていく）

表3-5（2）

問22 \ 問32-7	回答者数	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	わからない	無回答・不明
学習を受けてよかったと思っている	458 100.0% (100.0)	26 5.7% (8.0)	56 12.2% (16.4)	79 17.2% (14.1)	242 52.8% (52.5)	36 7.9% (9.1)	19 4.1%
学習を受けたことはよいが、内容は改善した方がよい	142 100.0% (100.0)	20 14.1% (16.1)	28 19.7% (24.8)	21 14.8% (15.3)	57 40.1% (34.3)	11 7.7% (9.5)	5 3.5%
受けない方がよかったと思っている	43 100.0% (100.0)	20 46.5% (47.9)	10 23.3% (22.9)	3 7.0% (8.3)	2 4.7% (12.5)	6 14.0% (8.3)	2 4.7%
よくわからない	165 100.0% (100.0)	27 16.4% (18.7)	31 18.8% (27.1)	20 12.1% (8.4)	43 26.1% (23.9)	32 19.4% (21.9)	12 7.3%

カイ2乗値 129.295 (前回 120.315)
p値 0.000 *** (前回 0.000 ***)

前回調査と今回調査を見比べると、「差別は自分には関係ない」「そっとしておけば、自然と差別はなくなっていく」のどちらの考え方も学習の受け止め方との相関が強まっています。

では、この数値の差異はどのように受け止めたらよいでしょう。教育・啓発・学習の「受け止め方」との相関ですから、相関が強まったことを、そのまま「学習成果が高まった」と受け止めることはできません。学習者の当時の心情としてマイナスの受け止め方をした人は、人権・同和問題を自分の問題として受け止めていないようになっていることが考えられます。

これは、前に記した、学習者側の課題も含んだ重要な問題になります。学習は、その受け止め方によって、学んだ知識を「人権尊重」「人権軽視」のどちらの態度にも傾かせ得るからです。

第3節 因習などの受け止め方と人権意識

人に対する差別や偏見、自分と何か違いがあることによって相手を排除しようとする態度などは、果たして、自然になくなるものでしょうか。いつしか内面化してしまう因習などの受け止め方と合わせて考えてみましょう。

1 「大安・仏滅」意識と職場に高齢者がいることへの不安感

問6-1（大安・仏滅などにこだわる）×問7-1（高齢者と同じ職場で働くとしたら不安になるか）

表3-6

問7-1 \ 問6-1	回答者数	なる	少しなる	どちらともいえない	あまりならない	ならない	無回答・不明
当然のことである	560 100.0%	35 6.3%	111 19.8%	82 14.6%	143 25.5%	175 31.3%	14 2.5%
反対しても仕方がないと思う	613 100.0%	39 6.4%	109 17.8%	84 13.7%	187 30.5%	177 28.9%	17 2.8%
間違っていると思う	202 100.0%	14 6.9%	25 12.4%	20 9.9%	45 22.3%	94 46.5%	4 2.0%

カイ2乗値 26.945

p値 0.001 ***

大安や仏滅などの日取りに対する意識と、「職場で高齢者と一緒に働く場合不安を感じるか」についてクロス集計した結果を表3-6に示します。

大安・仏滅などの日取りに関する意識と、職場に高齢者が共に働くことに不安を感じるかについては、若干の相関があります。本人自身も気づかないうちに、いつの間にか相手を排除していることがあることを示す調査結果といえます。因習にこだわらない人ほど、こうした排除をしない傾向があることがうかがえます。

2 「清め塩」習慣に対する意識と差別問題の受け止め方

問6-2 (清め塩を配る習慣) × 問7-1 (高齢者と同じ職場で働くとしたら不安になるか) 表3-7

問7-1 \ 問6-2	回答者数	なる	少しなる	どちらともいえない	あまりならない	ならない	無回答・不明
当然のことである	425 100.0%	34 8.0%	82 19.3%	72 16.9%	105 24.7%	123 28.9%	9 2.1%
反対しても仕方がないと思う	472 100.0%	32 6.8%	89 18.9%	62 13.1%	148 31.4%	132 28.0%	9 1.9%
間違っていると思う	458 100.0%	21 4.6%	71 15.5%	48 10.5%	116 25.3%	187 40.8%	15 3.3%

カイ2乗値 32.170 p値 0.000 ***

問6-2 (清め塩を配る習慣) × 問13-4 (差別だと取り上げていたらきりがない) 表3-8

問13-4 \ 問6-2	回答者数	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答・不明
当然のことである	425 100.0%	53 12.5%	96 22.6%	141 33.2%	54 12.7%	69 16.2%	12 2.8%
反対しても仕方がないと思う	472 100.0%	32 6.8%	120 25.4%	159 33.7%	83 17.6%	69 14.6%	9 1.9%
間違っていると思う	458 100.0%	43 9.4%	70 15.3%	144 31.4%	72 15.7%	120 26.2%	9 2.0%

カイ2乗値 42.386 p値 0.000 ***

同じような因習として「清め塩を配る習慣」と差別意識及び差別問題の受け止め方について調査結果を見ていきましょう。

表3-7は、「清め塩を配る習慣」と「高齢者と同じ職場で働くとしたら不安になる」とをクロス集計したものです。表3-6と「カイ2乗値」の比較でみると、こちらの方が5.2ポイント大きくなります。この差異が生じている理由は为什么呢。 「清め塩を配る習慣」は、大安・仏滅よりも「こだわらない人」が多いことは、単純集計結果から判明しています。つまり、多くの人々が、今ではあまりこだわらなくなった「清め塩を配る習慣」ですが、逆に「こだわり」を感じる人の場合、高齢者へのある種の「排除」感が湧き出すとみることができるようになります。一般に、何らかの形で因習にとらわれることはあると思いますが、それをさりげなく流せるかどうかということになるかもしれません。

表3-8は、同じく「清め塩を配る習慣」と「差別だと取り上げていたらきりがない」という意見に対する受け止め方をクロス集計したものです。「清め塩を配る習慣」に「こだわる」か「こだわらない」という意識の違いとのクロス集計は、前の高齢者が職場にいたらどうかという場合よりも、相関がはっきりしています。因習にとらわれがちなほど、排除や差別は仕方がない「宿命」や「業(ごう)」として受け止める傾向が強いことがわかります。

3 「清め塩」習慣に対する意識と差別の解決に関する受け止め方

問6-2 (清め塩を配る習慣)

×問13-6 (差別を問題化することによって、より問題が解決しにくくなる)

表3-9

問13-6 問6-2	回答者数	そう思う	どちらか といえば そう思う	どちらと もいえな い	どちらか といえば そう思わ ない	そう思わ ない	無回答・ 不明
当然のことである	425 100.0%	44 10.4%	69 16.2%	141 33.2%	63 14.8%	98 23.1%	10 2.4%
反対しても 仕方がないと思う	472 100.0%	44 9.3%	92 19.5%	181 38.3%	69 14.6%	80 16.9%	6 1.3%
間違っていると思う	458 100.0%	45 9.8%	56 12.2%	133 29.0%	65 14.2%	145 31.7%	14 3.1%

カイ2乗値 35.201
p値 0.000 ***

表3-9は、同じ「清め塩を配る習慣」と「差別を問題化することによって、より問題が解決しにくくなる」について、クロス集計したものです。

結果として、「清め塩を配る習慣」を意識する人と意識しない人との間に考え方の差異があり、相関もある程度あることがわかります。因習にとらわれやすい人ほど、問題が生じて問題だとして取り上げない方がよいと考えることがうかがえます。

わが国に古くから伝わる大切な伝統や文化は確かにあります。しかし、根拠のない因習などにとらわれたり、無批判に受け入れたりすることは偏見や差別的な行動へとつながる恐れがあります。「なぜ?」「本当に?」と自らに問い直す姿勢が大切です。

第4節 日常生活における人権意識と問題の受け止め方

では、その日常生活において培われる人権意識は、社会に発生する諸々の人権問題に対して、どのように効果を発揮しているのか、あるいは発揮しきれないでいるのか見てみましょう。

1 女性の上司と同じ職場で働く場合と夫婦間性別役割分担意識

問8-3（妻は、夫が全力で仕事ができるよう支えるべきだ）

×問7-2（女性の上司と同じ職場で働くとしたら不安になるか）

表3-10

問7-2 問8-3	回答者数	なる	少しなる	どちらとも いえない	あまりな らない	ならない	無回答・ 不明
そう思う	229 100.0%	24 10.5%	35 15.3%	25 10.9%	51 22.3%	85 37.1%	9 3.9%
どちらかとい えばそう思う	465 100.0%	15 3.2%	62 13.3%	95 20.4%	126 27.1%	163 35.1%	4 0.9%
どちらかとい えばそう思わ ない	342 100.0%	7 2.0%	29 8.5%	61 17.8%	109 31.9%	135 39.5%	1 0.3%
そう思わ ない	338 100.0%	9 2.7%	27 8.0%	36 10.7%	66 19.5%	195 57.7%	5 1.5%

カイ2乗値 95.507

p値 0.000 ***

表3-10は、妻は夫が全力で働けるよう努めるべきだという意見（性別役割分担意識）に対する受け止め方を尋ねた結果と、女性の上司と職場で一緒に働く場合に気になるかどうかと尋ねた結果をクロス集計したものです。男女共同参画社会づくりが進められて20年近くになります。この間に男女平等意識は相応に進んだことがうかがわれますが、性別役割分担意識を気にする人は女性が上司になることにためらいがあるようです。一方、その意識が進み性別役割分担意識が取り払われている人は、女性が上司であることにためらいがないことがわかります。

2 子どもとふれあう頻度と子どもに体罰を加えることに対する意識

問12-1（子どもとのふれあい）×問8-1（子どものしつけのために、少しくらいたたいてもよい）

表3-11

問8-1 問12-1	回答者数	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	無回答・不明
よくあった	581 100.0% (100.0)	119 20.5% (31.6)	177 30.5% (32.9)	111 19.1% (17.2)	161 27.7% (17.2)	13 2.2% (1.1)
時々あった	426 100.0% (100.0)	82 19.2% (28.9)	148 34.7% (36.2)	98 23.0% (15.6)	88 20.7% (16.3)	10 2.3% (3.0)
ほとんどない	202 100.0% (100.0)	42 20.8% (28.1)	79 39.1% (41.5)	41 20.3% (12.2)	35 17.3% (16.3)	5 2.5% (1.9)
まったくない	153 100.0% (100.0)	41 26.8% (34.0)	59 38.6% (28.9)	19 12.4% (17.0)	31 20.3% (16.0)	3 2.0% (4.1)

カイ2乗値 24.316（前回 18.827）

p値 0.004 **（前回 0.093）

表3-11は、子どもとのふれあう頻度と、子どもに体罰を加えることに対する考えとをクロス集計したものです。子どもとふれあう頻度とは相関関係があり、子どもと普段からよくふれあう人ほど、体罰はいけないという意識を高くしています。その一方で、体罰を加えることについては、「どちらかといえばそう思う」という意見が多いことが気がかりです。このクロス集計表からは、子どもとのふれあいの頻度の高い・低いと体罰に対する意識に関して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人の合計は前回調査から減少し、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」と答えた人の合計は前回調査から増加しています。児童相談所や警察に通報される児童虐待件数は、全国的に増加していますが、少なくとも市民の意識に見る限り「体罰はいけない」とする意識は高くなっていく傾向です。

3 高齢者とふれあう頻度と高齢者に対する固定観念

問12-2（高齢者とのふれあい）×問8-8（歳をとったら子どもの言うことに従うべき）

表3-12

問8-8 問12-2	回答者数	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	無回答・不明
よくあった	475 100.0% (100.0)	19 4.0% (4.2)	88 18.5% (22.8)	138 29.1% (25.0)	221 46.5% (45.3)	9 1.9% (2.8)
時々あった	513 100.0% (100.0)	18 3.5% (3.6)	96 18.7% (21.9)	182 35.5% (32.5)	202 39.4% (38.4)	15 2.9% (3.6)
ほとんどない	253 100.0% (100.0)	9 3.6% (5.7)	52 20.6% (20.3)	77 30.4% (32.7)	108 42.7% (39.9)	7 2.8% (1.4)
まったくない	131 100.0% (100.0)	8 6.1% (7.4)	29 22.1% (21.1)	35 26.7% (25.8)	58 44.3% (41.6)	1 0.8% (4.2)

カイ2乗値 10.320 (前回 19.711)

p値 0.325 (前回 0.073)

では、高齢者に対する固定観念はどうでしょう。表3-12は、高齢者とふれあう頻度と、「歳をとったら子どもの言うことに従うべき」という意見についてクロス集計したものです。この表からは、高齢者とふれあう頻度といわゆる「老いては子に従え」という意見との間には大きな相関は見られません。

4 障がい者とふれあう頻度と障がい者の求人が少ないことに対する意識

問12-3（障がい者とのふれあい）×問8-10（障がい者の求人が少ないのは仕方がない）

表3-13

問8-10 問12-3	回答者数	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	無回答・不明
よくあった	199 100.0%	11 5.5%	51 25.6%	51 25.6%	85 42.7%	1 0.5%
時々あった	380 100.0%	11 2.9%	119 31.3%	123 32.4%	122 32.1%	5 1.3%
ほとんどない	415 100.0%	22 5.3%	164 39.5%	127 30.6%	88 21.2%	14 3.4%
まったくない	351 100.0%	34 9.7%	122 34.8%	86 24.5%	97 27.6%	12 3.4%

カイ2乗値 51.291

p値 0.000 ***

次に、表3-13に、障がい者とふれあう頻度と「障がい者の求人が少ないのは仕方がない」という意見に対するクロス集計したものです。表からわかるのは、障がい者とふれあう頻度の高い方が、「障がい者に求人が少ないのは仕方がない」と思う比率が減ることです。ふれあいをとおして、雇用のバリアフリーを感知する機会も増大し、雇用場面における障がい者排除に対して「平等であるべきではないか」という自覚が高まることがうかがわれます。

5 外国人とふれあう頻度と外国人に対する意識

問12-5 (外国人とのふれあい) × 問8-11 (外国人が増えると治安が悪くなる)

表3-14

問8-11 問12-5	回答者数	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	無回答・不明
よくあった	93 100.0%	9 9.7%	18 19.4%	30 32.3%	35 37.6%	1 1.1%
時々あった	269 100.0%	27 10.0%	88 32.7%	103 38.3%	48 17.8%	3 1.1%
ほとんどない	399 100.0%	46 11.5%	132 33.1%	133 33.3%	79 19.8%	9 2.3%
まったくない	575 100.0%	89 15.5%	210 36.5%	154 26.8%	106 18.4%	16 2.8%

カイ2乗値 37.130

p値 0.000 ***

表3-14は、外国人とふれあう頻度と、外国人が増えると治安が悪くなると思うかを尋ねた結果をクロス集計したものです。ふれあう頻度の高い人の方が「そうは思わない」と答える人の比率が高いことがわかります。関わりが「まったくない」と答えた人たちが「治安悪化」を想定するのは何故でしょう。関わらないのですから、外国人がおよそどんな人たちであるかについての理解もほとんどないことが予測されます。それでも「治安が悪くなる」と受け止めるのは、過去に見聞きした事件や噂などによって作り上げた観念を固定化しているからではないかと思われます。固定化した観念を持つことが時には差別や偏見につながりやすくなることにあらためて気付かされます。

6 同和地区出身者とふれあう頻度と子どもの結婚時にとる態度

問12-4 (同和地区出身者とのふれあい)

×問25-1 (子どもの結婚相手が同和地区出身者の場合)

表3-15

問25-1 問12-4	回答者数	まったく問題にしない	迷いながらも、結局は問題にしないだろう	迷いながらも、結局は考え直すように言うだろう	考え直すように言う	無回答・不明
よくあった	51 100.0% (100.0)	25 49.0% (44.7)	20 39.2% (31.6)	3 5.9% (10.5)	2 3.9% (5.3)	1 2.0% (7.9)
時々あった	115 100.0% (100.0)	41 35.7% (37.3)	48 41.7% (40.2)	21 18.3% (14.7)	4 3.5% (4.9)	1 0.9% (2.9)
ほとんどない	402 100.0% (100.0)	132 32.8% (30.8)	201 50.0% (46.6)	56 13.9% (14.5)	8 2.0% (4.1)	5 1.2% (4.1)
まったくない	714 100.0% (100.0)	238 33.3% (27.3)	310 43.4% (46.2)	111 15.5% (16.4)	44 6.2% (4.3)	11 1.5% (5.8)

カイ2乗値 21.377 (前回 13.689)

p値 0.011 * (前回 0.321)

では、同和地区出身者とふれあう頻度と、子どもの結婚相手が同和地区出身であった場合にとる態度とのクロス集計にはどんな特徴があるでしょう。表3-15を見ていきましょう。

ふれあう頻度の高い・低いに関係なく「問題にしない」態度が全体的に増加しています。この点は、この5年間の同和教育・啓発の効果として評価することができます。

第5節 同和問題の認識と問題の受け止め方

前節まで、同和問題を含みながらも、主として人権問題一般について探ってきました。本節と次の第6節では、人権問題一般を含みながらも、主として同和問題を中心に、市民の認識、受け止め方、解決方法に関する理解などについて探っていきます。この節では、同和問題の認識と受け止め方を探ってみましょう。

1 同和地区への居留意識と差別意識

問14-1（同和地区の地域内である）×問13-1（差別は最も恥ずべき行為）

表3-16

問13-1 \ 問14-1	回答者数	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらとも いえない	どちらか といえば そう思わ ない	そう思わ ない	無回答・ 不明
避けると思う	242 100.0%	102 42.1%	96 39.7%	34 14.0%	5 2.1%	5 2.1%	0 0.0%
どちらかといえば 避けると思う	401 100.0%	189 47.1%	156 38.9%	47 11.7%	6 1.5%	0 0.0%	3 0.7%
どちらかといえば 避けないと思う	324 100.0%	176 54.3%	124 38.3%	18 5.6%	3 0.9%	1 0.3%	2 0.6%
まったく気にしない	404 100.0%	259 64.1%	101 25.0%	27 6.7%	2 0.5%	12 3.0%	3 0.7%

カイ2乗値 70.806

p値 0.000 ***

問14-1（同和地区の地域内である）×問26（A、Bどちらの意見に近いか）

表3-17

問26 \ 問14-1	回答者数	Aの意見 に賛成	どちらか というと Aの意見 に賛成	どちらか というと Bの意見 に賛成	Bの意見 に賛成	わからない	無回答・ 不明
避けると思う	242 100.0%	23 9.5%	55 22.7%	54 22.3%	19 7.9%	87 36.0%	4 1.7%
どちらかといえば 避けると思う	401 100.0%	70 17.5%	109 27.2%	65 16.2%	18 4.5%	132 32.9%	7 1.7%
どちらかといえば 避けないと思う	324 100.0%	54 16.7%	84 25.9%	57 17.6%	14 4.3%	110 34.0%	5 1.5%
まったく気にしない	404 100.0%	110 27.2%	94 23.3%	52 12.9%	18 4.5%	122 30.2%	8 2.0%

カイ2乗値 44.213

p値 0.000 ***

問 27 (同和地区の人たちに対する差別を将来なくすることができると思うか)

×問 14 - 1 (同和地区の地域内である)

表3 - 18

問14-1 問27	回答者数	避けると思う	どちらかといえ ば避けると 思う	どちらかといえ ば避け ないと思 う	まったく気 にしない	無回答・不明
そ う 思 う	348 100.0%	34 9.8%	69 19.8%	79 22.7%	153 44.0%	13 3.7%
どちらかといえ ば そ う 思 う	439 100.0%	74 16.9%	148 33.7%	116 26.4%	94 21.4%	7 1.6%
どちらかといえ ば そ う 思 わ ない	139 100.0%	79 30.9%	44 31.7%	30 21.6%	21 15.1%	1 0.7%
そ う 思 わ ない	71 100.0%	16 38.0%	116 22.5%	11 15.5%	16 22.5%	1 1.4%
わ か ら ない	259 100.0%	45 17.4%	81 31.3%	58 22.4%	64 24.7%	11 4.2%
差別がおこっ てい ることを知らない	143 100.0%	17 11.9%	40 28.0%	28 19.6%	52 36.4%	6 4.2%

カイ2乗値 117.351

p値 0.000 ***

表3 - 16、表3 - 17、表3 - 18は、同和地区に住宅を購入することに対する意識と差別意識に関してクロス集計したものです。

これらの結果は、住宅購入における忌避的態度が弱くなるほど、「差別は恥ずべき行為」という考え方が強くなり、「差別する人がやがて孤立する」「差別は将来なくすることができる」という展望が、忌避的態度を弱めることを示しています。すなわち、差別に対する考え方や解消の見通しが、態度や行動に影響を与えていることとなります。

2 差別的発言に対する態度と子どもの結婚時にとる態度

問 23（同和地区出身者への差別発言に対する態度）

×問 25（1）（子どもの結婚相手が同和地区出身者の場合）

表3－19

問23 \ 問25（1）	回答者数	まったく問題にしない	迷いながらも、結局は問題にしないだろう	迷いながらも、結局は考え直すように言うだろう	考え直すように言う	無回答・不明
差別的な発言であることを指摘して、差別について話し合う	234 100.0%	130 55.6%	82 35.0%	17 7.3%	4 1.7%	1 0.4%
表向きは話を合わせるが、どうにかして差別はいけないことを伝える	339 100.0%	119 35.1%	170 50.1%	39 11.5%	9 2.7%	2 0.6%
表向きは話を合わせ、何もしない	120 100.0%	15 12.5%	56 46.7%	40 33.3%	9 7.5%	0 0.0%
表向きは話を合わせ、自分も差別的な言葉を口にしてしまう	9 100.0%	0 0.0%	2 22.2%	5 55.6%	2 22.2%	0 0.0%
他の話題にかえようとする	204 100.0%	56 27.5%	108 52.9%	30 14.7%	8 3.9%	2 1.0%
何もせず、その場は黙っている	391 100.0%	111 28.4%	179 45.8%	60 15.3%	35 9.0%	6 1.5%
その他	67 100.0%	41 61.2%	14 20.9%	8 11.9%	2 3.0%	2 3.0%

カイ2乗値 169.396

p値 0.000 ***

次に、人が差別的発言をした時にとる態度と、自分の子どもの結婚相手が同和地区出身だった場合にとる態度との間にはどんな関係があるでしょう。表3－19に見ていきましょう。

「差別的な発言であることを指摘して、差別について話し合う」「表向きは話を合わせるが、どうにかして差別はいけないことを伝える」と答えた人の場合は、それぞれ90.6%、85.2%の比率で子どもの結婚相手が同和地区であることを「まったく問題にしない」「結局は問題にしないだろう」と答えています。これに対して、「表向きは話を合わせ、何もしない」「表向きは話を合わせ、自分も差別的な言葉を口にしてしまう」と答えた人の場合、その比率は、59.2%、22.2%と減少します。行動と意識や態度との間には強い相関がみられるように思われます。

3 子どもの結婚時にとる態度と人権意識

問 25（1）（子どもの結婚相手が同和地区出身者の場合）×問 22（同和問題を学習した感想）

表3-20

問22 問25（1）	回答者数	学習を受けてよかった と思っている	学習を受けたことはよいが、 内容は改善した方がよい	受けない方がよかった と思っている	よくわからない	無回答・不明
まったく問題にしない	283 100.0%	166 58.7%	35 12.4%	15 5.3%	51 18.0%	16 5.7%
迷いながらも、結局は 問題にしないだろう	425 100.0%	221 52.0%	71 16.7%	19 4.5%	81 19.1%	33 7.8%
迷いながらも、結局は 考え直すように言うだろう	122 100.0%	56 45.9%	26 21.3%	5 4.1%	23 18.9%	12 9.8%
考え直すように言う	41 100.0%	14 34.1%	8 19.5%	3 7.3%	9 22.0%	7 17.1%

カイ2乗値 126.435

p値 0.000 ***

問 25（1）（子どもの結婚相手が同和地区出身者の場合）×問 5-1（水平社宣言）

表3-21

問5-1 問25（1）	回答者数	知っている	内容は知らないが名称は聞いたことがある	知らない	無回答・不明
まったく問題にしない	483 100.0%	68 14.1%	76 15.7%	320 66.3%	19 3.9%
迷いながらも、結局は 問題にしないだろう	624 100.0%	59 9.5%	101 16.2%	442 70.8%	22 3.5%
迷いながらも、結局は 考え直すように言うだろう	205 100.0%	13 6.3%	30 14.6%	153 74.6%	9 4.4%
考え直すように言う	70 100.0%	4 5.7%	14 20.0%	50 71.4%	2 2.9%

カイ2乗値 85.104

p値 0.000 ***

問 25（1）（子どもの結婚相手が同和地区出身者の場合）×問 5－4（同和対策審議会答申）

表 3－22

問 5－4 問25（1）	回答者数	知っている	内容は知らないが名称は聞いたことがある	知らない	無回答・不明
まったく問題にしない	483 100.0%	75 15.5%	134 27.7%	255 52.8%	19 3.9%
迷いながらも、結局は問題にしないだろう	624 100.0%	92 14.7%	242 38.8%	273 43.8%	17 2.7%
迷いながらも、結局は考え直すように言うだろう	205 100.0%	25 12.2%	68 33.2%	104 50.7%	8 3.9%
考え直すように言う	70 100.0%	10 14.3%	24 34.3%	32 45.7%	4 5.7%

カイ 2 乗値 70.076

p 値 0.000 ***

表 3－20 は、人権・同和問題学習に参加した結果に対する感想とのクロス集計の結果です。子どもの結婚相手が同和地区出身であるかどうかを「まったく問題にしない」と答えた人と、同和地区出身者なら「考え直すように言う」と答えた人との間に学習への参加を「よかったと思う」評価で 24.6 ポイントの違いがあります。ただし、この表は見方によっては、「考え直すように言う」と答えた人のうち 34.1% は、「学習を受けてよかった」と思っていることを示すものでもあります。同和問題についての学習は役に立ったが、自分の子どもの結婚相手の場合は、まだ差別的態度に出してしまうことが暗に示されています。こうした意識を乗り越えられるかどうか、今後の課題になります。

表 3－21 は、こうした学習の結果ともいえる水平社宣言についての認知の度合いをクロス集計したものです。これは「知らない」と答えた人がとても多かったのですが、少数ながらも、「まったく問題にしない」と答えた人たちの方が「考え直すように言う」と答えた人たちより「知っている」比率が高くなります。

表 3－22 は、同様に「同和対策審議会答申」の認知度とクロス集計した結果を示すものです。「水平社宣言」の認知度の場合よりも相関関係は弱くなりますが、若干の相関が見られます。

では、「差別は人間として最も恥ずべき行為」と考えるかどうか、「差別は法律で禁止する必要がある」と思うかどうかをクロス集計したらどうなるでしょう。

問 25 (1) (子どもの結婚相手が同和地区出身者の場合)

×問 13 - 1 (差別は人間として最も恥ずべき行為)

表 3 - 23

問13-1 問25(1)	回答者数	そう思う	どちらか といえば そう思う	どちらと もいえな い	どちらか といえば そう思わ ない	そう思わ ない	無回答・ 不明
まったく問題にしない	483 100.0%	296 61.3%	131 27.1%	30 6.2%	3 0.6%	11 2.3%	12 2.5%
迷いながらも、結局は 問題にしないだろう	624 100.0%	324 51.9%	230 36.9%	51 8.2%	9 1.4%	2 0.3%	8 1.3%
迷いながらも、結局は 考え直すように言うだろう	205 100.0%	75 36.6%	92 44.9%	32 15.6%	2 1.0%	3 1.5%	1 0.5%
考え直すように言う	70 100.0%	27 38.6%	23 32.9%	16 22.9%	2 2.9%	1 1.4%	1 1.4%

カイ 2 乗値 112.959

p 値 0.000 ***

問 25 (1) (子どもの結婚相手が同和地区出身者の場合)

×問 13 - 2 (差別は法律で禁止する必要がある)

表 3 - 24

問13-2 問25(1)	回答者数	そう思う	どちらか といえば そう思う	どちらと もいえな い	どちらか といえば そう思わ ない	そう思わ ない	無回答・ 不明
まったく問題にしない	483 100.0%	143 29.6%	129 26.7%	153 31.7%	15 3.1%	29 6.0%	14 2.9%
迷いながらも、結局は 問題にしないだろう	624 100.0%	145 23.2%	201 32.2%	206 33.0%	39 6.3%	23 3.7%	10 1.6%
迷いながらも、結局は 考え直すように言うだろう	205 100.0%	31 15.1%	67 32.7%	79 38.5%	16 7.8%	12 5.9%	0 0.0%
考え直すように言う	70 100.0%	12 17.1%	14 20.0%	20 28.6%	6 8.6%	15 21.4%	3 4.3%

カイ 2 乗値 87.413

p 値 0.000 ***

表 3 - 23 から、子どもの結婚相手が同和地区出身者であるかを問題にしない人の方が、差別を恥ずべき行為だと答える比率が高くなるのがわかります。ただ、ごく一部、恥ずべき行為だと思わない人もいます。また、子どもの結婚相手が同和地区出身者だとわかった場合「考え直すように言う」と答えた人でも、7割の人たちは、差別は恥ずべき行為だと答えています。そこには本音(子どもの結婚相手は同和地区出身者でないことを)と建て前(差別は確かに恥ずべきことだ)の微妙な困惑が渦巻いている様子がうかがえます。

この点については、表 3 - 24 から同様の結果がうかがえます。

さらに、差別について一般によく問われる事柄とのクロス集計を見ていきましょう。

問 25 (1) (子どもの結婚相手が同和地区出身者の場合)

×問 13 - 6 (差別を問題化することによって、より問題が解決しにくくなる)

表 3 - 25

問13-6 問25(1)	回答者数	そう思う	どちらか といえば そう思う	どちらと もいえな い	どちらか といえば そう思わ ない	そう思わ ない	無回答・ 不明
まったく問題にしない	483 100.0%	48 9.9%	57 11.8%	143 29.6%	72 14.9%	147 30.4%	16 3.3%
迷いながらも、結局は 問題にしないだろう	624 100.0%	48 7.7%	104 16.7%	225 36.1%	99 15.9%	134 21.5%	14 2.2%
迷いながらも、結局は 考え直すように言うだろう	205 100.0%	23 11.2%	43 21.0%	73 35.6%	26 12.7%	40 19.5%	0 0.0%
考え直すように言う	70 100.0%	14 20.0%	21 30.0%	18 25.7%	4 5.7%	10 14.3%	3 4.3%

カイ 2 乗値 72.910

p 値 0.000 ***

表 3 - 25 は、「差別を問題化することによって、より問題が解決しにくくなる」と思うかどうかをクロス集計した結果です。子どもの結婚について差別意識の少ない人ほど「そう思わない」と答える人の比率が高くなっています。しかし、中には「そう思う」と答えた人もおり、そっとしておけばいいのという考えの人も、まだかなりいることがわかります。

問 25 (1) (子どもの結婚相手が同和地区出身者の場合)

×問 13 - 8 (差別の原因には差別される人の側に問題があることも多い)

表 3 - 26

問13-8 問25(1)	回答者数	そう思う	どちらか といえば そう思う	どちらと もいえな い	どちらか といえば そう思わ ない	そう思わ ない	無回答・ 不明
まったく問題にしない	483 100.0%	25 5.2%	30 6.2%	155 32.1%	77 15.9%	182 37.7%	14 2.9%
迷いながらも、結局は 問題にしないだろう	624 100.0%	28 4.5%	57 9.1%	267 42.8%	114 18.3%	145 23.2%	13 2.1%
迷いながらも、結局は 考え直すように言うだろう	205 100.0%	14 6.8%	32 15.6%	83 40.5%	39 19.0%	36 17.6%	1 0.5%
考え直すように言う	70 100.0%	12 17.1%	16 22.9%	25 35.7%	2 2.9%	11 15.7%	4 5.7%

カイ 2 乗値 67.599

p 値 0.000 ***

表3-26は、「差別の原因には差別される人の側に問題があることも多い」と思うかどうかとのクロス集計の結果です。子どもの結婚について、差別意識があるか否かとの間にかなり強い相関がみられます。同和地区の人との結婚は、「考え直すように言う」と答えた人の場合、40.0%の人たちが「差別される側に問題がある」と答えており、問題はかなり深刻で、表面的な学習ではなく、本質に立ち入った学習が必要なことを示す数値といえます。

問25(1)(子どもの結婚相手が同和地区出身者の場合)

×問13-9(差別されている人の話をきちんと聴く必要がある)

表3-27

問13-9 問25(1)	回答者数	そう思う	どちらか といえば そう思う	どちらと もいえな い	どちらか といえば そう思わ ない	そう思わ ない	無回答・ 不明
まったく問題にしない	483 100.0%	270 55.9%	129 26.7%	46 9.5%	10 2.1%	13 2.7%	15 3.1%
迷いながらも、結局は 問題にしないだろう	624 100.0%	261 41.8%	243 38.9%	79 12.7%	12 1.9%	16 2.6%	13 2.1%
迷いながらも、結局は 考え直すように言うだろう	205 100.0%	73 35.6%	93 45.4%	29 14.1%	6 2.9%	3 1.5%	1 0.5%
考え直すように言う	70 100.0%	26 37.1%	20 28.6%	14 20.0%	4 5.7%	3 4.3%	3 4.3%

カイ2乗値 109.816

p値 0.000 ***

「差別されている人の話をきちんと聴く必要がある」と思うかどうかとのクロス集計はどうでしょう。この問いに対しては、多くの市民が「そう思う」と答える傾向にあります。子どもの結婚相手が同和地区出身者だとわかった場合「考え直すように言う」と答えた人の65.7%が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えており、全体に「相手の言い分は聞くべき」という態度が大勢を占めています。ただ、少数ですが4.3%の人が「そう思わない」と答えている点も留意事項として受け止めなくてはなりません。

第6節 同和問題の解決方法に関する認識

最後に、市民が同和問題の解決方法に向けてどのような意識を持っているか、いくつかのクロス集計表から探ってみましょう。どんな問題でも、一挙に解決に至らないことが多いと思いますが、時間をかけ、理解者を拡大し、丁寧に話し合う態度と行動がどの程度市民に浸透し根付いているかを見てください。

1 子どもの結婚時にとる態度との相関から検討した場合

子どもが同和地区出身者と結婚したいという場合にどんな態度をとるかは表2-58 (P127) に示しています。「まったく問題にしない」「迷いながらも結局は問題にしないだろう」と答えた人が78.2%に達しますが、「考え直すように言う」「迷いながらも結局は考え直すように言うだろう」と答えた人も19.4%になります。それ以外は「無回答・不明」ですが、19.4%の市民が、いくぶんかの「差別意識」を持っていることになります。では、結婚時のこの「差別意識」はどのように解決できるでしょうか。

第5節においても、子どもの結婚時にとる態度とのクロス集計表を提示しました。それら全体を通じてわかるのは、「差別は人間として最も恥ずべき行為のひとつである」と答えた人たちの中にも、子どもの結婚時には「差別意識」が表面化する人がいる事実です。

憲法において「婚姻は両性の合意に基づいて行われるものである」とされているにもかかわらず、現状では、まだ家意識が根強くあるために、それが人権意識に少なからず影響があると考えられます。根強く残る家意識が、同和地区出身者にとって、結婚についての障壁になっているといえます。

2 同和地区に住宅を購入することに対する意識から検討した場合

問12-4（同和地区出身者とのふれあい）×問14-1（同和地区の地域内である）

表3-28

問14-1 問12-4	回答者数	避けると思う	どちらかといえ ば避けると思う	どちらかといえ ば避けないと思う	まったく気に しない	無回答・不明
よくあった	64 100.0%	6 9.4%	8 12.5%	11 17.2%	26 40.6%	13 20.3%
時々あった	136 100.0%	10 7.4%	32 23.5%	29 21.3%	42 30.9%	23 16.9%
ほとんどない	420 100.0%	65 15.5%	132 31.4%	113 26.9%	87 20.7%	23 5.5%
まったくない	751 100.0%	148 19.7%	206 27.4%	148 19.7%	202 26.9%	47 6.3%

カイ2乗値 39.977

p値 0.000 ***

表3-28は、同和地区に住宅を購入することに対する意識に対して同和地区の人たちとのふれあいがどの程度あったかをクロス集計したものです。ふれあいがあれば互いに相手を理解し合うと思われれます。

問われるのは、形だけのふれあいはかえって差別意識を助長する可能性があることへの留意と、問題解決に有効なふれあい方法を開拓することです。外国籍の人が比較的多い地域の保育所を訪れますと、皮膚や髪や眼などの色を越えて、幼児たちが思い思いに遊び戯れる姿に接します。子どもたちを世話する保育士も、そうした子どもたちの外見や容貌に気を取られることなく保育にあたっています。差別意識を持たずに自然な容認をしあふれあいが、こうした保育所などで実現しているのを実感します。障がいのある子どもと一緒に保育する場合も同じような情景が展開します。

保育所で見られるこうした事例を手掛かりに検討した場合、ふれあいに、統合的側面、あるいはインクルーシブな（互いに容認して包み込む）側面があるか否かが、人権・同和問題の解決に関係するよう思われます。インクルーシブな形式と内容を帯びたふれあいが盛んに展開する方途を探る必要があるよう思われます。

問 14 - 1 (同和地区の地域内である) × 問 18 (「同和地区出身者は怖い」と聞いたことがあるか)

表 3 - 29

問14-1 \ 問18	回答者数	あ る	な い	無回答・不明
避 け る と 思 う	242 100.0%	123 50.8%	113 46.7%	6 2.5%
どちらかといえば避けると思う	401 100.0%	147 36.7%	248 61.8%	6 1.5%
どちらかといえば避けないと思う	324 100.0%	74 22.8%	245 75.6%	5 1.5%
まったく気にしない	404 100.0%	90 22.3%	305 75.5%	9 2.2%

カイ 2 乗値 75.235

p 値 0.000 ***

表 3 - 29 は、同様に「同和地区出身者は怖い」と聞いたことがあるか否かをクロス集計した結果を示したものです。同和地区だとわかったらそこに住宅を購入するのは控えると考えの一つの背景に、「同和地区の人は怖い」等と聞いている面があることがわかります。聞いたことを本当にそうだと信じているか否かはわかりませんが、こうした根拠のないうわさ話を信じることも差別意識の一つの現れです。こうした噂が飛び交うのを断つには、「事実」と事実でない「噂」とを識別する能力を習得する必要があります。こうした態度は、幼少期からの家庭教育はもちろん、学校において「事実」と単なる「思い」とを区分して学習することが、どの教科においても必要です。

3 自然と差別はなくなるという意見への反応から検討した場合

問 32 - 7 (そっとしておけば自然と差別はなくなる)

× 問 13 - 5 (差別問題は差別されている人の問題)

表 3 - 30

問13-5 問32-7	回答者数	そう思う	どちらか といえば そう思う	どちらと もいえな い	どちらか といえば そう思わ ない	そう思わ ない	無回答・ 不明
そ う 思 う	186 100.0%	12 6.5%	17 9.1%	43 23.1%	34 18.3%	74 39.8%	6 3.2%
どちらかといえば そ う 思 う	221 100.0%	3 1.4%	22 10.0%	54 24.4%	71 32.1%	67 30.3%	4 1.8%
どちらかといえば そ う 思 わ ない	208 100.0%	1 0.5%	14 6.7%	49 23.6%	67 32.2%	74 35.6%	3 1.4%
そ う 思 わ ない	526 100.0%	5 1.0%	10 1.9%	86 16.3%	108 20.5%	309 58.7%	8 1.5%
わ か ら ない	197 100.0%	2 1.0%	2 1.0%	55 27.9%	49 24.9%	84 42.6%	5 2.5%

カイ 2 乗値 130.716

p 値 0.000 ***

表 3 - 30 は、「そっとしておけば、自然と差別はなくなっていく」という意見に対して、「差別問題は、差別されている人の問題で自分には関係ない」と思うか否かをクロス集計したものです。

この結果は、「そっとしておけば、自然と差別はなくなっていく」と考える人が「差別問題は、差別されている人の問題で自分には関係ない」と捉える傾向にあることを示しています。当然差別は、差別する人がいなくなればなくなります。しかしながら、たとえ差別をする人がいた場合でも、周囲の人や社会から指弾されるような環境であれば、差別する人はなくなってくると考えられます。差別に同調したり、黙って見過ごしたりしている限り、差別はなくなりません。

相手のことを自分のこととして引き受けたり、自分の問題として捉えたりする想像力を高めるとともに、差別は許されないという社会環境を構築することが重要です。

